

令和5年度 自己点検・自己評価

1. 目的

この自己点検・自己評価は、看護師養成所としての本校の「教育水準の維持・向上」と「創意工夫のある教育の追及」を図るため、教育評価の一環として、組織的、継続的に実施するものである。

2. 方法

(1) 評価規準

国の「看護師等養成所の教育活動に関する自己評価指針」（平成15年7月25日）に基づいて行う。

(2) 評価点

9カテゴリー・125項目について、次のとおり3段階に数値化。

よくあてはまる：3 大体当てはまる：2 当てはまらない：1

(3) 評価者

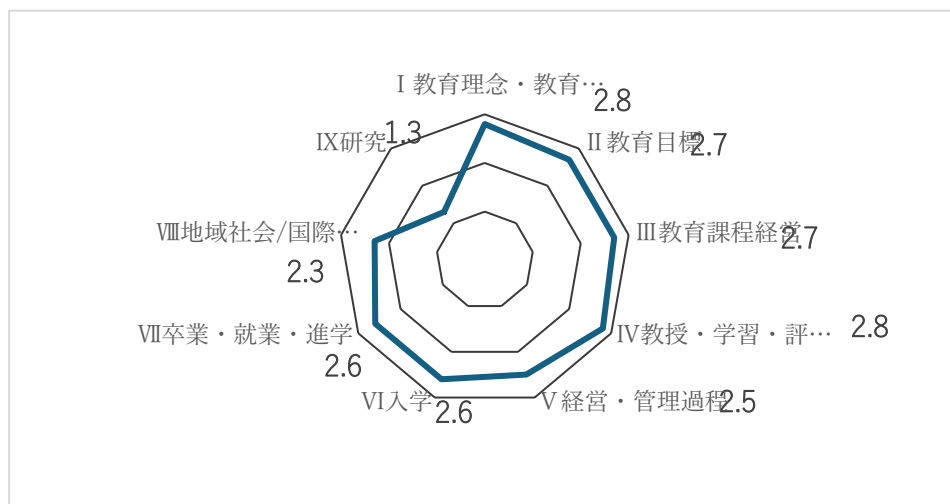
教職員全員

本校では、新カリキュラム運営に備えて、平成30年に教育課程編成委員会を設置、新たなカリキュラムの編成に活かすべく、課題の検討、改善に取り組んできた。

今年度は、新カリキュラム1年目であり、旧カリキュラムと並行して教育活動に取り組んだ。

I～IXカテゴリーの評価について、自己評価を行ったため、結果を公表する。

自己点検・自己評価グラフ



3. 結果

<自己評価の要約>

I. 教育理念・教育目的

II. 教育目標

1) 旧カリキュラム最終年度の3年次について、卒業時到達度は、おおむね高い評価となっているが、解剖生理や疾患に知識不足を感じる学生が多く、病態に基づいたアセスメント力が弱い。

社会情勢への無関心や認知症患者の増加、家族との面会制限などから社会的側面の情報が得られず、全人的な理解には到達していない。

- 2) 卒業生のホームカミングを開催した際の意見から、就職後、看護を提供する中で、薬理学の知識が不足していることに気づいた。

また、4年度卒業生は、コロナ禍での臨地実習で、制限が厳しく、患者やその家族と直接かわることができず、就職後の患者や家族との人間関係に苦慮している。

III. 教育課程経営

- 1) 本校は、担任副担任制で教員を配置し、クラスを束ねて、両方で役割を補完しながら、学生への対応を実施している。しかし、教員は、複数領域の講義や実習を担当し、授業や実習指導が重なり時間割の変更を余儀なくされる。

講義や実習の担当時間数は130時間を超えており、業務が重積し、時間割に苦慮し、勤務時間内に授業準備や学籍管理ができず、時間外労働となる。

授業準備について、授業資料だけでなく事前課題の作成に時間を要する。演習においては、非常勤講師(臨床指導者)との打ち合わせが必要で、両者の勤務の合間を縫うため余裕がない。

放課後は、実習指導で時間を要し、提出された事前課題を確認する時間の確保が難しく、時間外労働となる。

- 2) 臨地実習について、教員が現場に残ることが条件で実習の受け入れが許可され、スタッフの勤務体制や病棟の状況によっては、臨床指導者が学生指導に当たることが困難である。教員は、講義と実習引率の調整が困難である。

母性・小児看護学実習受け入れ施設では、セキュリティの観点から、電子カルテの閲覧開封やセキュリティカード(鍵)の利用は引率教員しか許可されず、常に実習施設に待機していないと差し支える。

講義と実習引率、担任業務をこなすには、現在の教員数では限界である。

- 3) 学校行事(オープンキャンパス、新入生交流会、体育祭など)では、学生自身が先を見通しつつ企画・運営することで、学生の主体性を育てるため、教員が助言指導を行っている。その役割をクラス担任が担っているため、ますます担任業務がかさんでいる状況である。

- 4) 看護教員向けICT教材を取り入れているが、時間の余裕がなく興味のある講座があっても視聴できず、自己研鑽に当てる時間を確保する難しさを訴える声が多い。教育力を向上させようにも余裕が生まれない。

IV. 教授・学習・評価過程

- 1) 1年次の専門基礎科目「人体の構造と機能Ⅰ」は、系統別に振り分けた授業内容を動画やドリルを利用して講義。今年度は、テストに係る学習量の負担を軽減するために前半後半の2回に分けてテストを実施。しかし、及第点に満たない学生は減少せず、教員による補講や個人指導を実施したが、1名の単位保留者が出てしまった。次年度は、講師を細分せず、解剖から疾患とつながるように従来の講師(医師)に戻す。単位保留学生については、長期休暇中に集中講義を実行し、単位取得ができるよう計画する。

- 2) 基礎看護学は、看護過程や看護技術に関する授業時間数が、カリキュラム通りでは履修が厳

しいため、時間数を増やす方向で計画する。看護技術に関する学習進度や学習内容について、基礎看護学実習での実習内容に間に合うように時期を調整する。演習で事例を看護展開する際には、臨床指導者を講師として迎えることを継続し、臨場感を持たせる。「診療の補助技術」について、実習施設の協力を得て、病室でシミュレーターやCPS（中央配管システム）を使用しての演習が実現した。

3) 2年次の「地域・在宅・老年看護学実習」は、1年次の地域で暮らす生活者と暮らしの場の理解を受けて、老人クラブ、上部シニア交流センター、訪問介護、認知症対応型通所介護、サービス付き高齢者向け住宅・デイサービス等、多様な暮らしの場での看護を実習することができた。しかし、高齢者の暮らしの場の選定や日程調整が遅れ、カリキュラム申請通りの実習配置ができなかった。実習をしながら施設側と協議を繰り返した結果、次年度は、カリキュラム申請通りの実習配置に計画することができた。

4) 地域・在宅看護論は、訪問看護ステーションの閉鎖に伴う講師の変更を余儀なくされ、関連施設である訪問看護ステーションに実習及び講義を引き受けていただいたが、訪問看護師一人がすべてを担うこととなってしまい、業務に支障が出てしまった。次年度は、市内の訪問看護ステーションで活躍する訪問看護師を講師に加えて、特性を生かした講義内容にすみわけして時間数の軽減を図ることとする。

5) 精神看護学は、演習において、精神科における社会復帰に向けた支援の場、精神科デイケア、精神科訪問看護、就労継続支援施設、自立訓練施設の見学を新たに取り入れた。病棟以外の場で関わることは、ノーマライゼーションの考え方の醸成につながる。しかし、精神に障がいをもつ人々とコミュニケーションを図る上では、独特な空気感や会話の間（沈黙）、視線などに戸惑った学生が多い。

臨地実習は、コロナ感染症対策により午前中のみとなり、患者によっては午前中調子が悪く、午後から活動性が上がることもあり、十分に患者の生活を捉えることができなかった。次年度は、1日実習が可能となり、10日間臨地で実習を行うよう計画する。

6) 成人・老年看護学では、2年次新カリキュラム、3年次旧カリキュラムであり、授業進度が混在するため、外部講師や臨床指導者には、従来の内容から新しい内容への移行がスムーズにできるよう説明を繰り返した。臨地実習については、健康状態別に看護を学ぶことができるようⅠ～Ⅳに分け、2年次のⅠ、「外来・手術室看護」、Ⅱ、「急性期・回復期看護」では、コロナ感染症が5類に移行したことで、実習時間の制限がなくなり、手術室実習では、手術が最後まで見学でき、術中患者の経過が理解できた。2年次では、周術期患者の外来看護だけでなく、慢性期患者の外来看護を見学する機会が多かったが、講義が追いついておらず、学生にとっては、理解まで到達していない。3年次実習オリエンテーションで2年次での外来実習や慢性期看護講義、3年次実習へとつながっていることを理解させる。

3年次のⅢは「退院支援看護」、Ⅳは「慢性（リハビリ）期・終末期看護」で、「退院支援看護実習」が新設され、入退院支援センターでの実習が加わる。

7) 小児看護学は、「小児看護学実習Ⅰ」において、旧カリキュラムでは、保育園を実習施設として選定し、成長発達過程に合わせた生活行動の世話や遊びを通して、コミュニケーションを重ね、健康な小児の理解に努めた。新カリキュラムでは、地域で暮らしているさまざまな環境に置かれている小児や障害を持ちつつ暮らしている小児が利用する放課後デイを実習先に加える。遊びやふれあいを通して、障害を持ちつつ暮らしている小児を理解する。

「実習Ⅱ」において、小児領域では、入院している小児や家族への接触は感染防止の観点から避けることを求められ、シャドーでの看護体験が継続された。実習計画について実践が制限され、なおかつ多忙な看護師を呼び留めることには限界があり、学生は看護実践現場を見学することすら難しい状況である。

8) 母性看護学は、講義時間数の減少により、母性或周産期についての理解が追い付いていない。旧カリキュラムで活用したドラマやドキュメンタリーの視聴、絵本の紹介等をする時間が無くなり、e-教材や事前課題で補った。学生の母性看護に対する理解が追い付いていないため、授業構成が崩れたことは、大きな痛手である。講義時間数の調整や講師との講義内容の整理をして修正する。

9) 旧カリキュラムでの統合演習や統合実習は、最後の臨地実習に向けての課題が明確で、臨床指導者が演習から参加することが臨床判断を学ぶきっかけとなっているため、今後も継続する。

次年度は、3年次の臨地実習が新カリキュラムに移行し、統合実習Ⅰが新設される。各人の目標達成に向けて自由に実習施設を選択できる実習である。学生は、希望通りの様々な部署へ配置される。初めての試みなので、学校と臨地との調整が必要であるが、教員は、他の外部実習引率と重複する現状では、かなりの負担になると思われる。

10) 看護研究は、「看護研究Ⅰ」と「看護研究Ⅱ」の2科目で構成されており、2年次では事例検討、3年次では看護研究を完成させる。

「看護研究Ⅰ」(事例検討)を完成させるために、講義や講師との個人指導を繰り返すが事例検討を文章化するには、看護を多面的にとらえる力が弱く指導に要する講師の負担は大きい。

「看護研究Ⅱ」(看護研究)は、3年次完成に向けて、2年次「看護研究Ⅰ」講義後半で看護研究計画書の講義を受け、計画書を作成し、研究に取り掛かる準備を行う。本研究は、グループで取り組むが、計画書に難航し、研究続行ができないと判断されたグループが出た。よって、グループ研究は3グループ(16名)が続行、10名は個人での事例検討に変更する。

11) 新カリキュラムでは、実習評価に学習者が学習目標や学習内容の到達度が可視化されることの利点を活かし「ルーブリック評価」を取り入れている。評価方法の変更に合わせて、臨床指導者への勉強会を実施。教員と指導者の評価の視点が一致し、支障なく評価でき、学生指導では、つまづき部分を示しながら指導することができた。学生が学習の指標として活用するには至っていない。

V. 経営管理過程

- 1) 自宅学習や看護技術練習がスムーズに取り組めるように、複数の e-教材を選択したが、教員や学生から使いこなせないといった意見があり、看護部が看護技術系 e-教材を変更する機会に合わせて、教材を1つに絞る。国家試験対策・学習支援教材は凝り返し問題を解きなおすことで学力向上が期待され、好評である。
- 2) 教科書は、e-テキストが主流で継続中。メモ機能や資料の張り付け、教科書の持ち運びが手軽である。しかし、眼精疲労や学習方法の変化、知識の定着に不安を抱え、従来の紙教科書を希望する学生が徐々に始まった。
- 3) 課外授業は、基礎学力向上や国家試験対策として定着している。今年度は、対象を絞った授業で低学年の利用率を増やし、定期購読雑誌やレビューブックを用いた学習方法をレクチャーすることで、学習習慣の定着を図った。時期を選べば、参加率は増加するが、全体で見ると参加率の低下は続いている。
- 4) 組織体制について、臨床から異動した実習指導教員は、3年目を終え、本人の希望もあり、年度末をもって病院へ異動となる。教員確保のために、病院看護部には尽力いただき、新たな実習指導教員として看護師1名の異動がなかった。異動後、専任教員養成講習会受講予定(5~11月)である。教員確保のために、以前より学校と病院の人材交流を図っているが、看護師不足も大きな問題となっており、両施設の人材交流は厳しい状況である。さらに、教員の高齢化も進んでおり、学校運営を継続させるための人員確保は難しい。

VI. 入学

推薦19名、社会人選抜1名合計20名の入学予定。オープンキャンパス参加経験者の受験率100%である。

VII. 卒業・就業・進学

19名(入学時23人)卒業。第113回看護師国家試験結果は、18名/19名合格(94.7%)。全国では、全体87.8%(新卒93.2%)であり、全国平均を超えた。

- 1) 卒業時の到達目標に対する自己評価について、解剖生理や疾患に知識不足を感じる学生が多く、病態に基づいたアセスメント力が弱い。社会情勢への無関心や認知症患者の増加、家族との面会制限などから社会的側面の情報が得られず、全人的な理解には到達していない。3年になり、実習施設の制限が緩和されたことで、看護実践の機会は広がったが、根拠を持った看護には至っていない。1年次から習得している倫理観については、3年次臨地実習でのカンファレンスを通して見つめなおす機会が得られている。
- 2) 卒業生アンケート結果では、学校に対する満足度は高い。担任による学修支援のきめ細やかさに満足している。授業進度について、2年次後期に4領域の演習が重なり学習への負担が大きく不満を抱いた。ICTに関する通信環境は、集中すると通信状況が悪くなるため、満足度は低い。
- 3) 保護者アンケート結果では、子どもの成長を感じており満足しているが、国家試験に向けて学習支援のさらなる強化を希望している。学校の取り組みや学習成果を知る機会を設けているが、周知には至らず、参加率が低い。保護者面談については、支援が必要な学生のみとしているため、認知度は低い。

4) 卒業生のホームカミング

就職後の卒業生とのつながりが希薄で、卒業後の支援ができていなかった。今年度は、就職後の活動状況を知るために、7月アンケートを実施、仕事に精いっぱい生活に充実感がない様子であった。10月学校へ集まる機会を設け、29名中11名が出席、教員や同窓会役員が加わり、仕事を離れた場所で、意見を交わすことはよい相談相手となり、互いの立場を超えて本音や考えを知り、満足感の高い会となった。

VIII. 地域社会・国際交流

- 1) ボランティアクラブは、今年度より国際 meet up クラブが新設され、1年生が中心となり、新居浜市在住外国人との交流の場で活動している。以前より開設しているクラブについては、コロナで活動が縮小されていたが、徐々に活動の場が広がりを見せている。
- 2) 今年度から、講師を招いた特別講義以前に授業で紹介される国の歴史や人口動態、生活状況、宗教や文化について、グループ学習を取り入れた。

IX. 研究

授業研究や看護教育研究などに取り組み、教育力を向上させようにも余裕がなく、計画が立たない状況である。